

陸軍愛国号献納機調査報告

その3「機種、金額、命名式、
記念絵葉書、報国号との違い」

横川裕一



昭和8年4月29日の命名式における愛国79「労働」号（九二式戦闘機）。

愛国号の判明機種

献納された機種はさまざまで、制式機となったものはほとんどが献納されている。以降、概略を示すとともに、献納された機種が制式時期や一般に公開された時期とどういう関係にあるか、判明しているものを表1に列記した。ほとんどは公開されてから愛国号になっているが、試作機や増加試作機などの特異な例もある。

●戦闘機

戦闘機では、九一式に始まり、二式単戦「鍾馗」、複戦「屠龍」、三式戦「飛燕」までが献納記念絵葉書で見ることができている。

加えて、四式戦は「献納されたと記憶しています」という九州の方がおられ、また群馬の今井工業（当時）から1機献納されたことも判明している。昭和18年ごろで1機36万円、福生飛行場（現横田基地）にて命名式とのことである（写真1）。

さらに、新潟県の石川氏からは、昭和20年5月に中国青島で五式戦もが献納されたという情報も、お寄せいただいている。

●爆撃機

軽爆は、八八式、九三式単軽、九三式双軽、九七式、九八式が確認できている。重爆では九七式、百式は判明しているが、九三式と四式は確認できていない。

●偵察機

八八式、九二式、九四式、九七式司偵、九八式直協、九九式軍偵、百式司偵、三式指揮連（写真2）が判明している。

●その他

九五式練習機、フォッカー・スーパーユニバーサル改造の患者輸送機、DHブスモスやフォックスモスまでもが献納されている。

●試作機

まずは、「学芸技術奨励金」扱いの高速連絡機・愛国131、132号がある。連

載その1で既述したが、愛国号として献納される機体は、制式機であれば「国防献金」として扱われるが、それが非制式機の場合「学芸技術奨励金」として取り込まれ、そこから献納手続きがされることになっている。つまり、愛国131号、132号は制式機ではないのである。機種名の「高速連絡機」がキ15の試作機と一致していることもあり、従来から、愛国131号・132号はキ15ではないかとされてきたが、その巷説のとおり、キ15の増加試作機ということが、陸軍書類で確認できている。

また、試作機と言えば、キ61（三式戦試作機、または増加試作機）が愛国1737号として写る命名式写真がある。存在が発表もされてない時期で、献納者にどう機種を説明したのか興味深い。

試作機のトリとして、四式戦を挙げる。福生の陸軍航空審査部におられた方の絵目誌から、昭和18年4月にキ84（後の四式戦）の愛国号命名式があったことが分かる。それによれば、機体に

写真1. 愛国6960「群馬今井」号（協力：アイテック株式会社）。



写真2. 愛国4066「家庭愛国」号（三式指揮連絡機）。



表1. 制式期時期と愛国号 (制式年月日のグレイ欄は、『日本陸軍制式機大鑑』による)

制式年月	陸軍通牒	機種	公開	愛国号		備考
				判明最若番号	命名式年月	
昭和3年2月		八八式偵察機1型		愛国5「小布施」	昭和7年3月	
		八八式偵察機2型		愛国6「日毛」	昭和7年3月	
昭和6年4月	準制式(陸普第1747号)	八八式軽爆撃機		愛国4「小布施」	昭和7年3月	
昭和6年12月		九一式戦闘機	昭和7年1月の 陸軍始めて飛行	愛国3「小布施」	昭和7年3月	
昭和7年4月	仮制式(陸普第5526号)	九二式戦闘機		愛国20「朝鮮」	昭和7年5月	
昭和7年7月		九二式偵察機		愛国49「愛知」	昭和7年8月	
昭和8年8月	仮制式(陸密第526号)	九三式重爆撃機		(現時点まで、判明愛国号なし)		
昭和8年8月	仮制式(陸密第527号)	九三式双発軽爆撃機		愛国104「精糖」	昭和9年6月	
昭和8年8月	仮制式(陸密第527号)	九三式単座軽爆撃機		愛国100「三重」	昭和9年3月	
昭和9年10月	仮制式(陸密第608号)	九四式偵察機		愛国120「文明瑠」	昭和10年3月	
昭和10年6月	準制式(陸普第3585号)	九五式1型練習機		愛国133「京城第一」	(不明)	
昭和10年7月	準制式(陸普第4237号)	九五式2型練習機		(現時点まで、判明愛国号なし)		
昭和10年12月	準制式(陸普第7131号)	九五式3型練習機		(現時点まで、判明愛国号なし)		
昭和10年11月	制式(陸密第867号)	九五式戦闘機		愛国130「宮澤」	(不明)	
昭和12年11月	制式(陸密第1572号)	九七式司令部偵察機		愛国131、132	—	増加試作機、昭和11 年5月に機体完成。
昭和12年11月	制式(陸密第1572号)	九七式輸送機		愛国126「片倉」	(不明)	
昭和12年11月	制式(陸密第1572号)	九七式戦闘機		愛国273「野田醤油」	昭和13年5月	軍資料によると、愛国215 「松坂屋」号は九七戦。
昭和12年11月	制式(陸密第1572号)	九七式重爆撃機		愛国445「大観」	昭和15年5月	
昭和12年11月	制式(陸密第1572号)	九七式軽爆撃機		愛国295「杵島」	(不明)	
昭和13年8月	仮制式(陸密第1092号)	九八式軽爆撃機		愛国332「大日本」	(不明)	愛国301「山基」の可 能性もあり。
昭和13年12月	仮制式(陸密第1748号)	九八式直協偵察機		愛国286「日本皮革」	昭和14年6月	
昭和14年7月	仮制式(陸密第1051号)	九九式高等練習機		(現時点まで、判明愛国号なし)		
昭和15年5月	仮制式(陸密第844号)	九九式襲撃・軍偵機		愛国569「九州菓子」	(不明)	記念絵葉書では九七 軽爆。
昭和15年5月	仮制式(陸密第844号)	九九式双発軽爆撃機		愛国589「愛婦東京」	(不明)	
昭和15年9月		百式司令部偵察機	昭和18年9月20日、 第4回航空日	愛国585「家庭愛国第六 第七」	(不明)	
昭和15年9月		百式重爆撃機		愛国1423「広島電気」	昭和18年4月	
昭和16年5月		一式戦闘機	昭和17年3月8日	愛国661「日本茶葉」	昭和17年秋	
昭和16年7月		一式双発高等練習機		(現時点まで、判明愛国号なし)		
昭和17年1月		一式貨物輸送機		(現時点まで、判明愛国号なし)		
昭和17年1月		二式単座戦闘機	昭和18年9月20日、 第4回航空日	愛国2234「石崎プレス釘」	昭和19年4月	
昭和17年8月		二式複座戦闘機	昭和19年11月26日 新聞各紙	愛国6145「朱雀」	昭和20年2月	
昭和18年6月		三式戦闘機	昭和20年1月16日 新聞各紙	愛国1737「繊維雑品」	昭和18年9月	増加試作1号機。2 号機も愛国号の模様。
昭和18年12月		三式指揮連絡機		愛国1697「真言報国」	昭和18年9月	制式前に献納?。
昭和19年3月		四式戦闘機	昭和20年4月11日 新聞各紙	?	昭和18年4月	
昭和19年4月		四式基本練習機		(現時点まで、判明愛国号なし)		
昭和19年8月		四式重爆撃機		(現時点まで、判明愛国号なし)		
昭和20年2月		五式戦闘機		?	昭和20年5月	

は赤色の極秘マークがあり、軍の関係者のみの出席、神官のできる軍関係者がその代理を努めたとのこと。時期的には試作第1号機ということになる。なお、この愛国号と前述の「群馬今井」号との関係は、明らかにできていない。

愛国号の金額

献納機はどのようにして機種が決められたのだろうか。

献納者側では予定機種に合わせた金額を計画したであろうが、その予定金額に達するかどうかは不明だったが、最終的な献納金額によって機種(戦闘機とか爆撃機といったレベル)や機

数が決められていったと考えられる。さらには、額によってエンジン付きかなしかに分かれただろう。

では、1機はどれくらいの金額で献納できたのだろうか。

陸軍書類(昭和7年、陸普114号)に、国防献品として適正なる物品の品目単価表というのが載っている。

・戦闘機	7万円
・偵察機、軽爆機	8万円
・重爆撃機	20万円
・(参考)戦車	8万円

また、『国防献品記念録』では昭和8年7月31日調べとして、それまでの献納機の内訳が掲載されており、平均価

格が分かる。

- ・戦闘機：計39機合計2,876,086円(平均73,745円)
- ・軽爆撃機：計18機合計1,528,050円(平均84,891円)
- ・偵察機：計7機合計656,377円(平均93,768円)
- ・患者輸送機：1機75,000円(愛国40号、フォッカー・スーパーユニバーサル)
- ・小型通信機5機：合計136,440円(平均27,288円、愛国63～68号、DHブスモス)

さらに『国防大写真帖』(昭和10年2月)では、具体的な機種ごとに価格が明記されている。

- ・八八軽爆、八八偵：8万円
- ・九一戦、九二偵：7万円（エンジンは約3万円）
- ・八七重爆：20万円

これらを煙草で現在価格と比較してみる。「たばこと塩の博物館」から、昭和7年当時の値段を教えていただいた。

「口付たばこ」・敷島（20本）18銭

・朝日（20本）15銭

「両切たばこ」・チェリー（太巻10本）

10銭

- ・ゴールデンバット（10本）7銭

上記から、戦闘機は「朝日」466,666箱分に相当することが分かる。近年価格（一箱400円）から単純計算すれば、戦闘機は1億8,600万円程となる。

少し下って、昭和12年の陸軍書類『国防献品に適正なる物品の価格（陸密第873号）』では、次となっている。

- ・九三双軽爆：14万7千円

- ・九三重爆：24万4千円

- ・九四偵：10万8千円

- ・九五戦：7万5千円

- ・九五練1型：4万2千円

後の九七戦は海軍機（九六艦戦）と合わせて16万円余で献納されており、昭和18年や19年でも戦闘機は一機あたり約8万円で献納されている。

愛国号命名式

献納機は献納にあたって、関係者を集めた命名式が行なわれている。式典には神式による祭壇が設けられ、神主の祝詞などの神事後、陸軍大臣（またはその代理）からの命名書の読み上げ、感謝状授与、操縦者への花束贈呈、献納機などによる展示飛行が行なわれることが通常であった。その展示飛行の

操縦者には、初期のころは同県出身者が選ばれ、郷土色を高めていた。

これらの命名式は急速に大掛かりなものになり、入場券までもが発行されるような、航空イベントの様相を呈するようになった。写真3に、入場券を示す。

写真4も同時期、すなわち、献納熱が盛り上がっていたころの愛国69「富国」号（昭和8年10月、代々木練兵場）の献納記念絵葉書である。陸軍大臣による命名、献納者代表による目録贈呈、そして記念撮影の3コマがカラーで入っており、献納者が自前で調製するという熱の入れようが窺える。すでに命名式は次第に航空ショー的な要素が加味されてきており、海軍「報国号」では、源田サーカスの異名で知られる曲技飛行が有名になった。

開戦を経て太平洋戦争の中盤になると、飛行場に献納機を置いてというかたちでの命名式は減り、地方での献納が増えたこともあってか献納者近くの学校、公民館などにおいて献納機の写真額（多くは、献納記念絵葉書を引き伸ばしたもの）で命名式を行なうことが多くなっている。一方、その反動か、東

← 写真5. 昭和16年、羽田での命名式。

↓ 写真7. 愛国3143「柏崎市民」号の献納記念絵葉書。



京などの大都市部で一度に数十機以上の命名式が行なわれるようになり、昭和15年に制定された航空日（9月20日）などと連動して一大イベント化した。例をあげれば、昭和16年の第2回航空日に羽田飛行場で30万人を集めての航空大会の中で命名式（写真5）が行なわれ、昭和18年の第4回航空日には羽田で357機、大阪で34機、名古屋で31機の命名式があったことが分かっている。

戦争終盤からはこの命名式自体が簡素化・自粛され、海軍報国号では昭和20年5月に「以降の命名式は取り止め」という発表があった。陸軍愛国号についても資料を見つけていないが、同様であったろうと思われる。

愛国号と絵葉書

初期のころの愛国13「石川」号での献納記念絵葉書セットを、写真6に示す。地上と飛行中の絵葉書1枚ずつに、諸元などを記したリーフレット（後に、半分のサイズになる）、これらを入れる絵葉書袋で1セットである。来賓への記念品として配布されており、こういう絵葉書の費用も献納金から賄われた。愛国325「東京鋳物」号の献納報告書では、3,000組が交付されたとある。

この献納記念絵葉書も、愛国100号を超えるころから段々と妙な絵になってくる。防諜上の理由も時期的にあってか、機種不明な珍妙な絵葉書も多くな



写真3. 愛国37「小布施」号命名式の入場券（昭和7年6月）。

写真4. 愛国69「富国」号命名式の彩色絵葉書。



写真6. 愛国13「石川」号の献納記念絵葉書セット。



写真8. 愛国100「三重」号(九三式単発軽爆撃機)。



写真9. 愛国120「文明時」号(九四式偵察機)。

ってきている。

さらに経費節減であろう。2枚の彩色絵葉書は片方のみ、そして両方白黒となり、時代が下がるにしたがって、写真に愛国番号と献納者を書き込んだ(修正した)だけの絵葉書に変化していく。写真7はその例である。焼き付けの愛国号番号と名称、そして、写真上の胴体に直接書き込まれた名称が見える。

珍妙な献納記念絵葉書

ここでは、献納記念絵葉書における珍妙な絵葉書を取り上げてみる。

●八八式? (愛国100「三重」号、写真8)

八八式にも見えるが、実機は九三単軽爆。単に画家に見せる写真を間違えたのか、それとも絵心のない画家だとかうなるのか…。同じ九三単軽爆である愛国109「日本特殊鋼」号、110「明治生命」号、112「不動貯金」号も、絵自体は異なるものの、同様な機種不明な絵葉書になっている。愛国115「遍照」号、118「安川勤労」号は、九三単軽爆に見える絵葉書になっているのだが。

●う〜ん? (愛国120「文明時」号、写真9)

愛国120号の実機は九四偵だが、そのようには見えない。初期の九四偵の絵葉書は知る限り、この図柄が多い。同時期の九五戦も、ほとんどが類似の感じだが、そちらの方は、後述する報国号との比較にて示す。



写真10. 愛国273「野田醤油」号(九七式戦闘機)。

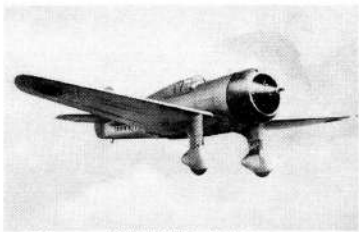


写真11. 愛国291「実業学生」号(九七式戦闘機)。

●九七司偵? (愛国273「野田醤油」号、写真10)

機種は戦闘機とあるが、どう見ても九七司偵にしか見えず、しかも風防・キャノピーがなくなっていて…。同日(命名式は、昭和13年5月)に献納された愛国275「新勝」号(成田山新勝寺 献納)も同じ絵葉書になっている。

本機は陸軍資料では九七戦だが、九七戦は昭和12年12月に仮制式採用と同時に「軍事秘密」になっており、その秘密事項には「当面の間、写真撮影、新聞掲載を禁ず」となっている。一方、「神風」号で姿は知られていたからか、同じく仮制式となった九七司偵は「軍事秘密」ながら「武装装備、性能」のみが秘密事項であった。これらのことが、この謎の図柄の一因かもしれない。

●九六艦戦? (愛国291「実業学生」号、写真11)

九六艦戦(2号密閉風防型)か、固定脚のP-36Hか、またはフォッカーD.21(胴体銃搭載型)?

陸軍資料では本機も九七戦だが、そうとは見えない。九七戦の絵葉書については、愛国307「北日本」号(命名式は昭和14年6月)では九七戦そのものが描かれており、愛国313「相撲」号の命名式(昭和14年2月)写真に九七戦が写っている。この時期には、軍事秘密の「写真撮影、新聞掲載を禁ず」という秘密事項は解除されていたのだろう。

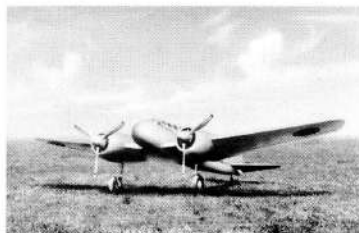


写真12. 愛国585「家庭愛国第六」号(百式司令部偵察機)。



写真13 (2枚). 愛国699-700「日本綿スフ」号(戦闘機)。



写真14. 愛国126「片倉」号。

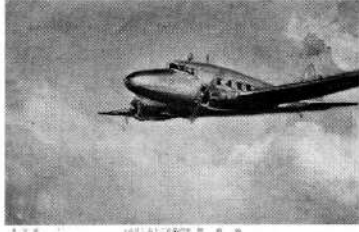


写真14. 愛国126「片倉」号。

●何? (愛国585「家庭愛国第六」号、写真12)

実機は百式司令部偵察機だが、機首あたりの修正がひどいため、まったく別機の影響がある。

●機種改変期(写真13、写真14)

九七戦から一式戦への改変期における献納記念絵葉書は、1枚が九七戦、もう1枚が一式戦という組み合わせが多かった。愛国699-700号「日本綿スフ」号は、その一例である。

それは許せるとしても、1枚が九七戦、もう1枚が双発機(九九軽爆)という、さらなるミスもある。

●絵葉書からの機種発掘(愛国126「片倉」号)



写真15. 愛国13「石川」号(上)と報国5「石川」号。

絵葉書は、まれに重要な情報源となれる。その一例を、以下に示す。

愛国126「片倉」号は、従来の市販書籍ではフォッカー・スーパーユニバーサルとなっていて、命名式時期も昭和10年11月とされていることが多い。

ただし、入手できた絵葉書からは、どう見ても九七式輸送機(中島AT)にしか見えない。陸軍資料によれば、「高倉」号は昭和11年6月に「中島式輸送連絡機」として献納手続きがなされている。別の陸軍書類(国防献品取扱月報)では、昭和11年6月に「輸送連絡機」1機が計上されており、これが「高倉」号に該当するだろう。この計上金額が19万円と高額で、前述した「スーパーユニバーサル」系の価格(昭和7年秋当時で、¥75,000)との隔たりが大き過ぎる。価格的には「双発機では？」と想像され、該当しそうな機種は九七式輸送機に絞られる。

入手できた胴体後部写真からも、スーパーユニバーサルには見えず、九七式輸送機が正しいと思われる。

愛国号と報国号の違い

両者の違いは、いくつかある。

1つ目は、愛国号の名称には号が含まれないのに対して、報国号は「○○號」と号まで名称に含まれている点である。胴体への表記も、報国号は「號」までを描いている(写真15参照、ごく少数の例外を除く)。

2点目は、同じ献納者から複数の献納機を受けた場合、愛国号では「○○第n」という命名が多いのに対して、報国号では例外なく「第n○○」という命名である。朝日新聞社の呼びかけによる「全日本」号でも愛国号は通し番号がないのに対し、報国号には「第n號全日本號」と通し番号が付いている。複数機を同時に献納する場合なら別だが、第二、第三があるかは分らないことが多いだろうから、愛国号の数え方の方が合理的に思える。

3点目は、同じ献納者からの同時期の献納機でも、愛国号と報国号で機体名称が異なるものがある。名称が軍からの指定なのか献納者が希望するものかは不明だが、愛国号はどこか固い感じがする。以下に、例を示す。

- ・愛国6「日毛」 報国1「ニック號」
- ・愛国314「将校婦人」 報国296「将校婦人会號」
- ・愛国584「華道池坊」 報国478「池坊號」
- ・愛国273「野田醬油」 報国214「キッコーマン號」

愛国275「新勝」 報国296「成田山號」
4点目としては、欠番の違いである。愛国号では42、44、89の各号がそれぞれ「死に、死し、厄」につながるとして欠番であるが、一方の報国号では加えて100番台から300番台の42、44、89も欠番になっている。また、機体名称でも前述した報国全日本号のように通番のあるものは、42、44、89を除外して命名している。

最後に、献納者から見た違いは、どうだったのだろう。

昭和12年の陸軍文書に「愛国機受納方針に関する意見の件」という、報国号献納との差異について記したものがある。それによれば、以下となっている。

- ・陸軍機は原則的に完備の機体を受納し、特別な事情がある場合に装備品を除いて、機体のみを受納。海軍機も同様であるが、機体のみで価格にて受納することが相当多い。

- ・陸軍機では実用機は最低7万5千円(戦闘機)を要するが、海軍機では献納価格を見るに3万2千円(艦上爆撃機)～4万2千円(艦上戦闘機)で、実



写真16. 同時期の愛国215「松坂屋」号(上)と報国159「松坂屋號」ほかの献納記念絵葉書。



際価格の半分近くである。

- ・陸軍機の命名式では相当の経費(約2千円余)が献納者の負担となり、事務補助費として50円、招待状調製費として数円の支援があるのみだが、海軍機では招待者の接待費等の補助費1千円内外を支援。

総じては、献納者が両軍の差異の大きさに困惑しており、地方官民に与える印象(すなわち、陸軍不人気)が懸念されるという内容になっている。加えて、

- ・海軍は、海軍大臣代理者その他式場における放送者などを、特別に中央より派遣。

- ・招待者に贈与する絵葉書は、海軍機のプロマイドに対して、陸軍は石版刷の粗末なもの。

ともある。確かにこの報告書の書かれた昭和12年前後の愛国号の献納記念絵葉書は、かなり安っぽい絵葉書になっている(写真16参照)。

その献納記念絵葉書は、愛国号が1機ごとに地上と空中の2枚を一組で、同一献納者から複数機が献納された場合にのみ、複数機が描かれるパターンである。一方、報国号では初期から命名式毎に作っていたようで、複数献納者からの複数機が一枚の絵葉書に描かれており、1機だけの命名式でも絵葉書は1枚である。このパターンは、献納機数が増加していく、開戦後も見られる。(つづく)